

プロローグ

統計曼荼羅の拝み方

— 統計学の世界を鳥瞰するために

めくるめく統計学の世界へようこそ

私たちの周囲を見回せば、魑魅魍魎のごとき“ビッグ・データ”が昼夜を問わず出没し、“データ・サイエンティスト”と名乗る錬金術士どもが跳梁跋扈しています。本書をたまたま手にされたみなさんは、憂き世のデータ至上主義に疲れ果てつつも、数字の海を日々懸命に泳ぎ、どこかにあるだろう「至高の統計分析」なる蜘蛛の糸にすがりつこうとしているのではないのでしょうか。苦しくはないですか？ つらくはないですか？ そういうみなさんに、私は次の引導を渡した上で悩ましい憑きものを落としてさしあげたいと思います。

データの荒海を泳ぎきってもどこにも「究極の真実」などありはしないのだ。
統計学はそのときその場かぎりでの「最良の結論」を導く便法にすぎないのだ。

現世を生き続ける私たち人間にとって天上の極楽浄土を説くことは何の意味もありません。みなさんがこれから取り組もうとしている統計学は、表面的には数学と数式のヨロイに包まれ、その大魔神のごときいかつい形相はこの一世紀あまりにわたって多くの初心者を震え上がらせてきました。しかし、実をいえば、統計学とは永遠なるアイデア界のお花畑を散策するための道案内ではありません。むしろ、地上の荒野を切り拓いてゆかねばならない生身の人間が手にする武器と呼ぶのがふさわしいでしょう。

統計学とともに生きる道

生物としてのヒトは、太古の昔から現在にいたるまで、さまざまな環境のもとで生き続け、その進化の過程で多くの特性を獲得してきました。不確定な状況のもとでの**推論能力**もそのひとつです。あやふやな状況のもとで、あるいはさまざまな情報が錯綜するとき、いかにして妥当な結論を導き出し次なる行動への意思決定を行なうか。ヒトの祖先が生きた先史時代にはそのような知的能力の有無は生死を分けることになったかもしれません。現代人にとってもあふ